



今号の表紙

銅金裕司「シルトの岸辺～動く絵：Hagenomyia pictorica」(2010-)

(アリジゴク、岩絵の具、皿)

作者のことは

ある日、器に小さな砂丘をこしらえてアリジゴク（Hagenomyia micans）を放ってみると、まさに砂漠を旅する放浪のペドウィンのように見えてきた。14世紀のイヴン＝ハルドゥーンは『歴史叙説』という本で「田舎や砂漠の生活形態は都会に先行し、文明の根源である」と言ったが、アリジゴクにおいても、造形やデザインという意味ではそのことが言えるように思う。すなわち、人はこれまで建築とか機械さらにはダムとか空港とか海岸の砂浜工事だとか、いろいろデザインしてきたが、結局、どれもが自然のかけがえのない造形を破壊しているように思える。人間が自分勝手なデザインで自然の造形の破壊してきたとしたら、それは、デザイナーとしてはていたらくだと言えるだろう。いったい、だれがこの世界で自然の造形に見合うようなデザインを創造したことがあるだろうか。

その点、アリジゴクが作るウスは浅いとアリに逃げられるし、深いと砂が落ちてくる。ウスを作るコストは、一匹のアリの熱量で賄えるはずで、決して、自然への大きな負荷になることなく、自然への完璧なデザインと言える。さらに絶望的なのは、自然を科学的に分析し総合しても、その自然への完璧なデザインという創造は結局には困難であろうと直感することなのだ。

しかしながら、そこで登場するのが、アートの精神であると信じたい。人はアートを通じて、さまざまな感性を養うことができ、さまざまな作品を制作できるのである。このような意味でアートの世紀の到来を信じてゆきたいと思う。

銅金裕司 Yuji Dogane

メディアアーティスト。京都造形芸術大学教授、東京芸術大学先端芸術表現学科非常勤講師。神戸市生まれ。海洋工学を修めた後、園芸に転向し千葉大学大学院博士課程修了（学術博士）。東京芸術大学で10年、独自の観点で創発について講ずる。脱領域的な試みに挑戦しつつ、メディアアートで美術館、ギャラリーなどで作品展示、ワークショップ多数。藤幡正樹と藤枝守とコラボレート作品多数。ラン科 植物の園芸的研究で学位を収めるも、最近ではランと昆虫の関係をランと人との関係に見立て、若い頃愛読したナボコフアールセルに回帰しつつ、新たな作家活動に向かう。

<http://wiki.livedoor.jp/dogane>